

平成27年度開院に向けて 新市立病院の基本設計

市立病院は、新築移転に向けての取り組みを進めています。

3月に新しい市立病院の基本事項を定める基本設計がまとまりました。

現在の市立病院が長年にわたり担ってきた、市民の皆さんへの「安心安全で質の高い医療」の提供を継承しながら、利用しやすく、より高度な医療機能を備えた病院を目指します。

来年度にかけて実施設計を行い、平成24年度に建設工事に着手。平成27年度の開院を予定しています。

※基本設計の概要は、市立病院のホームページからもご覧いただけます



施設整備の基本方針

- ①患者・家族など利用者の視点に立った施設
- ②安心安全な施設
- ③環境変化に対応できる施設
- ④業務の効率化に配慮した施設
- ⑤地域特性や周辺の環境・景観を考慮した施設
- ⑥経済性を追求した施設
- ⑦地球環境に配慮した施設

■移転先 上荒田町37-1

(日本たばこ産業鹿児島工場跡地)

■ベッド数 580~600床

■施設の規模

敷地面積約45,000㎡(現在の約2.8倍)
延べ面積約49,600㎡(現在の約1.2倍)
地上8階、塔屋1階

■利用者にわかりやすく機能的な病院へ

現在の市立病院は建て増しなどを行いがら社会のニーズに対応してきたため、動線が複雑で分かりにくいという声も聞かれます。

新しい病院では吹き抜ける「ホスピタルストリート」に沿って1・2階に外来部門を設け、関連する診療科を近くに配置するなど、利用する人にわかりやすい設計となっています。

【市立病院病院建設室 224-2101】



明るく開放的な「ホスピタルストリート」

「患者さんのためになるか」をすべての判断基準に

○病院は、病気を治す場所。最近では公立病院の赤字経営などが問題になり、その点に話題が集中しがちです。しかし、病院の経営は医療に役立つためにあるべきで、「赤字経営を行っている病院」＝「よい病院」とはいえません。健全な経営をし、それを患者さんに還元してこそ、患者さんにとってのよい病院であると思っています。市立病院は長年赤字の経営を行っていますが、それを患者さんに還元するため、質の高い新しい設備も積極的に取り入れてきました。

○新しい病院の基本設計も「患者さんのための医療」が前提になっています。診療科目も現在の20科目から増設し、患者さんが医療の谷間に落ちることがないように総合病院としての機能を高めます。

○病気がやがて病院に来る人は、不安で心も沈んでしまうことも多いはず。治療には、心も癒す必要があります。新しい病院は、緑と光に包まれた病院。沈んだ気持ちを少しでも明るくしてもらい、患者さんが安心して治療に専念してもらえるような病院を目指しています。



上津原 甲一 市立病院院長

- ◇場所 加治屋町20-17
- ◇診療科 内科、消化器科、循環器科、リウマチ科、小児科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、心臓血管外科、小児外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、放射線科、歯科、歯科口腔外科、麻酔科
- ◇受付時間 8時30分~11時(再診を受ける人が自動再診受付機で受け付けをするときは7時~11時)
- ◇休診日 土・日曜日、祝日、12月29日~1月3日
- ◇駐車場 約200台(お見舞いなどはできるだけ公共交通機関をご利用ください)
- ◇市立病院ホームページ <http://www.kch.kagoshima.kagoshima.jp/>



自動再診受付機
診察券を挿入すると自動的に受け付け、順番票を発行します。



自動精算機
診察券を挿入し、スムーズに医療費の精算をすることが出来ます。

市立病院が誇る高度な医療体制

救急医療

■県内唯一の第三次救急医療施設(救命救急センター)

市立病院は県内唯一の救命救急センターを設置。交通事故やけがによる外傷、脳卒中や心筋梗塞などの重篤患者の救命を目的として24時間体制で治療にあたり、年間に約7000人の患者を受け入れています。



鬼塚 満さんと妻菜穂子さんと長男航士君

○3月下旬、作中に雷に撃たれ心肺停止状態に。救急車を待つ間、同僚が心臓マッサージなど応急手当をしてくれました。

○近くの病院で応急処置を受けた後、市立病院救命救急センターに救急搬送され、意識が回復したのは4日後。心肺停止状態が長かったため、意識が戻るまで家族はとても心配したようですが、24時間体制で先生や看護師さんがそばについてくれることでとても心強かったそうです。

○応急手当をしてくれた同僚、24時間体制で見てくれた市立病院の皆さん、そしてそばで見守ってくれた家族がいたからこそ、今こうして回復できたことに感謝しています。現在は転院し、できるだけ早く社会復帰できるようにリハビリをがんばっています。

■災害時に優れた救命救急医療を發揮

市立病院は災害時に発生した重篤救急患者の救命医療を行う、基幹災害医療センターに指定されています。また、大規模な災害や事故が発生したとき、県知事の要請で、現場に派遣される災害派遣医療チーム(DMAT)も整備されています。



(右)訓練し出動に備えるDMAT

脳卒中センター

■3大死亡原因のひとつ「脳卒中」

日本人の3大死因、がん、心臓病、脳卒中。脳卒中は脳梗塞や脳出血、くも膜下出血のことで、死亡率が高く、後遺症が残ることも多い病気です。鹿児島は脳卒中による死亡率が全国平均よりも高いことから平成20年に脳卒中センターを開院しました。

■できるだけ早い専門的な治療を

脳卒中は発作が起きてから、いかに早く治療を始められるかがその後の経過に大きく影響します。脳卒中センターでは、脳卒中集中治療室(脳卒中ケアユニット)を3床設け、脳卒中専門医による24時間の対応により、発症直後から効果的に治療を行える体制を整えています。



検査・診断時間の短縮が可能な最新のMRI

市民のための「安心安全な質の高い医療」を 鹿児島市立病院

市立病院は昭和15年に誕生し、以来70年間にわたり鹿児島の中核的な総合病院として、市民・県民の命を支え続けてきました。安心安全な質の高い医療を目指す市立病院の取り組みを紹介します。【市立病院総務課 224-2101】

総合周産期母子医療センター

■開設のきっかけ~五つ子誕生

昭和51年、日本中で話題となった五つ子誕生。それをきっかけに、昭和53年、重症の低出生体重児などを収容しての24時間診療や、危険性の高い妊婦の分娩に対応した「周産期医療センター」が開院されました。その結果、かつて日本で最も高かった本県の新生児死亡率は急激に改善され、現在も低い水準を維持しています。



さらに、平成19年には母体・胎児集中治療室(MFICU)も設置され、総合周産期母子医療センターへと発展しました。

■「救命率の向上」から「障害なき救命」へ

新生児センターはベッド数80床で全国一の規模。うち36床は新生児集中治療室(NICU)で、500グラム前後の超低出生体重児や集中治療を必要とする新生児が、障害なく成長し発達できるように最新鋭の医療機器が整備されています。

■走る新生児集中治療室(NICU)「このとり号」

保育器、人工呼吸器、呼吸心拍監視装置など、集中治療室と同様の設備を備えた新生児専用高規格救急車「このとり号」。平成13年に導入され、今年3月リニューアルされました。「このとり号」は24時間体制で運用され、医師と看護師が乗り込み、県内のみならず、福岡などへも救急搬送を行っています。これまでの出勤回数は1200回を超え、多くの新生児救命に力を発揮しています。



(左上から)吉田健朗さんと妻めぐみさん、長女野々花ちゃん、次女菜々見ちゃん

○次女の菜々見は早産で生まれました。呼吸器と心臓に異常が見られ、対面もほとんどできないまま、出産した産婦人科からこのとり号で市立病院のNICU(新生児集中治療室)へ。不安でたまりませんでした。このとり号には市立病院の先生たちが乗り込んで来てくれていて、赤ちゃんのそばについてくれるとのことで信じて送り出しました。

○NICUに入っている間は、ずっとそばにいられる訳ではなかったのですが、看護師さんが作ってくれた連絡帳で毎日の様子を知ることができ、近くで見えてもらえることがありがたさを実感しました。

○小さな体にいくつもつながっていたチューブがひとつ、またひとつと外れていくたびに家族で喜び合いました。身近に市立病院のようにNICUが充実した医療施設があって本当に幸運でした。

命だけでなく安心を支える立場でありたい

○新生児センターにはいろいろな赤ちゃんが入院しています。両手のひらにすっぽり入ってしまうほどの小さな赤ちゃん、生まれてすぐ大手術を受けた赤ちゃん。そんな赤ちゃんが元気になり退院したあと、「小学生になりました」、「社会人になりました」と人生の節目に会いに来てくれることが、そんなときは本当にうれしいですね。そして同時に命の重さを改めて実感します。

○総合周産期母子医療センターには日本でもトップクラスの医療設備とチームがそろっています。そして「このとり号」は24時間いつでもどこでも、すぐに駆けつけます。赤ちゃんに何かあったらすぐ迎えに来てくれる医療チームがいますので、安心して子どもを産み、育てていただきたいと思います。



総合周産期母子医療センター 茨 聡 部長

市民の命を守る中核的総合病院

■市民の命を守り続けて70年

昭和15年に開設された市立病院は昭和32年に総合病院として承認を受けた後、頭部外傷救急センター(昭和43年)、周産期医療センター(昭和53年)、救命救急センター(昭和60年)、総合周産期母子医療センター(平成19年)、脳卒中センター(平成20年)などを開設常に市民や社会の

■全国に誇る健全経営

下の表は過去5年の収支状況を示したものです。厳しい経営を迫られている公立病院が多い中、市立病院は長年健全経営を維持しています。今後も、改革への取り組みを邁進させることがないよう、業務の

表 収支状況 単位:千円

年度	総収益	総費用	純利益
16	13,444,977	13,310,753	134,224
17	13,552,199	13,415,375	136,824
18	13,109,436	13,025,175	84,261
19	13,600,350	13,367,121	233,229
20	13,033,647	12,977,843	55,804

効率化に努め、改善を進めています。

■先進医療を積極的に導入

市立病院のベッド数は687床、鹿児島大学病院に次いで県内2番目の規模です。一日平均の入院患者数は527人、外来患者数は998人のほり専門医が充実した総合病院として、地域の核的役割を果たしてきました。

また、先進医療を積極的に導入し、臨床研修や実習を行うことで、医師、看護師、医療技術者などの人材育成にも力を入れています。

■自治体立優良病院総務大臣表彰
市立病院はこれまでの地域医療に対する貢献や経営の健全性が認められ、1000を超える自治体立優良病院総務大臣表彰を受けました(全国で4病院)。これは、平成10年に次いで2度目の受賞で、2度の受賞は大垣市民病院(岐阜県)と並んで初めてとなります。